

# ヨーロッパにおけるピカレスク小説の伝統とミハイル・ チュルコフの「美人の料理女」

直野 敦

主としてエカテリーナ女帝の時代に活躍した文学者ミハイル・チュルコフ（1743～92）は、ロシア18世紀文学の中で、特殊な地位を占めている。彼は、当時の文学の主流であった古典主義の文学に対して一定の距離を保ち、一段低い文学、無学文盲の大衆のための娯楽読物として軽蔑されていた散文小説を書きながら、次第に他の領域にまで手を広げ、商業の歴史あるいは民間療法などの大衆啓蒙書を出版して、広い意味での啓蒙主義運動にも寄与した文人であるが、文学史においては、常に二流あるいは三流の作家として扱われてきた。

しかし、ロシアにおける散文の発展史におけるチュルコフの意義は決して軽視することができない。特に、18世紀初頭のまだ民間伝承文学や中世末期の冒険物語につながる、いわゆる筆写本の物語「ロシアの水兵ヴァシーリー・コリオツキーの物語」などとは対照的に、皮肉な、時には冷笑的な目で卑近な人生の事実を描く諷刺的な文学、写実主義の方向にロシア小説の発展方向を位置づけ、特に、西ヨーロッパのピカレスク小説の伝統に触れ、そこから学びながらロシアにおける最初の典型的なピカレスク小説「美人の料理女」（1770）を創作し、次の世紀における小説の黄金時代に向って一つの踏み石となっていることは否定することができない。1961年に出版されたユーリー・シュトリーター「ロシアにおける悪漢小説<sup>1)</sup>、1970年に発表されたJ. G. ガッラードの「ミハイル・チュルコフ。その散文・詩作への手引き」<sup>2)</sup>が、前者はチュルコフの研究に大きな比重を置き、後者がチュルコフの生涯と作品に関する詳しい研究となっていることから見ても、西ヨーロッパの研究においては、ソビエトにおける以上にチュルコフのロシア小説史上における存在が重視されていることがうかがわれる。

ここでは、先ず簡単にチュルコフの生涯と作品について触れ、さらにその代表作としての「美人の料理女」と、西ヨーロッパのピカレスク小説の伝統との関連について考えてみることにする。

## (1)

チュルコフの生地あるいは生家についてはほとんど何ひとつ詳しいことは分っていない。ただ、貴族出身でなかったことは明かであり、恐らく、モスクワか、モスクワ近郊のあまり富裕でない商人または聖職者の家庭の出身であろうと考えられている<sup>3)</sup>。彼は、1755年に設立されたモスクワ大学の付属ギムナジウムのうち、非貴族（いわゆる雑階級人）の子弟のためのコースに1756年から、1758年または59年まで在籍している。そして、1758年5月12日付けで、学業成績優秀な生徒として賞状をもらったことが新聞「モスクワ報知」紙に出ている。恐らく、チュルコフ自身はモスクワ大学の学生となる積りであったろうが、なんらかの理由で、ギムナジウムを止めざるを得なかったのか、あるいは、演劇の世界に自ら進んで入ったのか、ともかく、3年後の1761年には、チュルコフはロシア宮廷付属劇場の役者となり、モスクワからペテルブルクへ移っている。また、別の記録によれば、チュルコフの学んだギムナジウムには18人の団員から成る劇団が存在しており、そのうちの数名が1761年にモスクワからペテルブルクの宮廷付属劇場に配置換えになったとあり、恐らくチュルコフもこの中の一人であったろうと推察されている。

1761年から1765年まで、チュルコフが劇場で働いたことは明かであるが、当時の記録に誤

ってその10年ほど前に設立されたフォードル・ヴォルコフの劇団の一員とされていることなどから考えて、チュルコフはせいぜい端役の地位しか与えられなかったようである。自分でも、役者としての才能に見切りをつけたからこそ、その4年後に退団を願い出たのであろうと思われる。この期間に彼は戯曲を3編発表しているが、そのうち1編だけがコピーの形で残されている。また、1768年にライプツィヒで出た42人のロシア作家たちのリストでは、チュルコフが「宮廷付理髪師」であったと述べられているので、チュルコフが、劇団において一種の振付師のような仕事も与えられていたのではないかという説もある。いずれにしても、この時期の終りにチュルコフは結婚し、1766年には長男ヴラジーミルが生まれているので、いつまでもうだつのあがらない役者稼業を続けて行くわけにはいかなかったのであろう。

1765年に劇団を去ったチュルコフは、まず宮廷付従僕となっている。従僕といっても、従僕全体の取締役のような役目であったらしいが、ともかく決して身分の高い役職ではない。チュルコフと同時期にモスクワ大学付属の貴族ギムナジウムで学んだフォンヴィジンはこの頃大臣秘書官を勤めており、ノヴィコフはエカテリーナの新法典委員会の書記となっていることを考えれば、チュルコフとの身分の差は明かである。チュルコフがこのあと様々の職につき、また、ジャーナリストとしてはほとんど独立で雑誌を発行するのも、自分の低い社会的身分と貧困から脱出しようとするための懸命な努力であったとも見られるのである。そして、そういういわば社会の底辺から上を見上げた時に目に映じる社会の姿がどのようなものであり、「下からの」人間観察と社会諷刺を基調とする西ヨーロッパのピカレスク小説の伝統が、出世の野心を抱いた若い知識人の目にどう映じたかも、ある程度理解され得るであろう。

チュルコフの文筆活動は、アラビアン・ナイト風の枠物語「嘲弄者、またはスラヴ人の昔話」1～4分冊をもって始まる。この作品は、1766年から68年にかけて刊行され、フォードル・エミンの「人生の浮沈、あるいはミラモンドの冒険」（1763）に次いで、ロシアで出版されたロシア人作家の二番目の小説にあたる。この小説は、17世紀フランスの騎士道物語やスカロンの「芝居物語」など種々の傾向の西ヨーロッパの小説の影響や、前世紀にまでさかのぼるロシアの冒険物語の伝統など多くの要素の混在する作品であった。第二版は、1783～84年に、さらに新しく書き加えられた第5分冊を加えた第三版は、1789年にそれぞれ発行されている。1767年には、「簡約神話事典」、1769年には小説「トロヤの包囲前のピュラの名によるアキレスの冒険」を出版したチュルコフは、1769～1770年にかけては、エカテリーナ女帝の「諸事万端」に刺激されたかのように、週刊誌「あれもこれも」、月刊誌「パルナスの小間物屋」の二つの定期刊行物の発行に全力を注いでいる。しかし、そのいずれもが短命に終わったことは、この時代に有力な保護者もなくジャーナリストとして活躍することの難しさを裏書きするものと言えよう。さらに1770年には、彼の代表的なピカレスク小説「美人の料理女、またはふしだらな女の遍歴」第一部が発表されている。そして、1770～1774年にかけては、「ロシア歌謡集」1～4分冊によってチュルコフはロシアにおける最初の民謡の集大成を実現している。恐らくこの頃には、文筆家としてのチュルコフの名前はある程度有名になり、エカテリーナ女帝にも認められていたと推察される。ジャーナリズムによっては、また作家としては生計を立てることができないことを痛感したチュルコフは、結局、官職に就く方向をとるのである。1772年に、十四等官（すなわち文官として最低の官位）として、チュルコフは貿易省に勤務し始めることになる。そして49歳の年齢でこの世を去るまでの二十年間に経済官僚として優れた能力を発揮し、官位も次第に上がり、1783年には、モスクワの近郊に領地を買い、その後、貴族の列に加えられるのである。晩年

には七等官になっているから、貴族出身でない人間としては異例の出世であったと言ってよいであろう。

しかも、チュルコフはこの間に、全七巻に及ぶ大著「ロシア商業史」（1781～1788）、「ロシア迷信事典」（1782）、五分冊の「民間医療事典」（1789～1790）、五分冊の「ロシア法典・判例集」（1792～96）をはじめ、先にあげた「歌謡集」の改訂やそのほかの著作も発表しているのであるから、驚くべき精力的な活動を続けたと言わねばならない。しかし、純粋に文学的な著作は、「嘲弄者」の第三版に加えられたその五分冊を構成する短篇小説のみで、他は、経済、法律などの経済官僚としてのチュルコフの活動に関係の深い著作が大半を占めていることに注目すべきであろう。それは余技としての文筆活動ではなく、役人としてのチュルコフの活動の一部なのであって、晩年に彼がエカテリーナ女帝に認められて、特別の補佐委員会の一員に加えられたのも「ロシア商業史」をはじめとする著作活動に負う所が大きかったのである。彼が1785年に書いた「勤務に就かんとするわが息子に与える訓戒」の中で、「神と女帝と帝室一家を尊び、有力者を尊敬するように」と書き、また「この遺言の目的は、お前が自分の行為において神の気に入られるように、皇帝のお役に立つように、そして社会にとって必要な人間となるように、お前の父親が絶え間ない労苦によって得た財産にふさわしい後継者となることなのである」と述べる時、それは1770年代までの諷刺作家としてのチュルコフの言葉ではなく、それ以後の官僚としての女帝の忠実な臣下としての言葉として理解されねばならない。貿易省では数年間チュルコフはラジーシチェフとともに同僚として働いているが、後者の急進的な思想とは遠い所にいたのである。

## (2)

チュルコフの生涯とその文筆活動全体は18世紀の啓蒙主義の一面を代表する性格を持っている。しかし、チュルコフの作品をこの時代の主流である古典主義の流れとの関係において考察すると、それはあくまで傍流でしかない。そして、これまでの文学史においては事実そのような扱いを受けてきている。また彼の活動そのものが文学以外の広い領域にも広がっており、量的にはむしろその方が多いためもあって作家として本格的な研究の対象になることは少なかった。しかし、文学史的には、彼の1770年にいたるまでの三つの小説は、諷刺文学、リアリズム小説の先駆的作品として重要であることは先にも述べた通りである。ここではロシア人作家による最初のピカレスク小説としての「美人の料理女」を考察の対象とし、西ヨーロッパのピカレスク小説との関連を考えてみることにしたい。

まず、この小説の粗筋を要約すると次のようになる<sup>4)</sup>。

この小説の女主人公マルトナは、いわゆる「ピカラ」すなわち「女ピカロ」であり、ヨーロッパのピカレスク小説の伝統においては、スペインの作家フランシスコ・ロペス・デ・ウーベダの「あばずれフスティーナ」（1605）、アロンソ・デ・サラス・バルバディーリョの「セレスティーナの娘」（1612）ドイツの作家グリーンメルスハウゼンの「放浪の女クラージュ」（1670）、ダニエル・デフォーの「モル・フランダーズ」（1722）の系譜につらなるものである。

一般のピカレスク小説の形式とは異なって、マルトナの生まれ、素姓についての記述はなく、マルトナがポルタヴァの戦い（1709）で軍人である夫を失い、未亡人になった所から話は始まる。そして、この時彼女は十九歳である。それから後の身寄りのないマルトナの男性遍歴がこの小説の主要な内容であり、ある年月を経た、恐らくは（この作品には示されていないが、ある安

定した境遇に到達した) 後年のマルトナが過去をふりかえってその一代記を語るという形式になっている。その点ではピカレスク小説の常道を踏んでいると言えよう。無一文の主人公はキエフで生活の道を求めている。そこに、これもピカレスク小説特有のあの女術が彼女に近づき、若い男を世話しようと申し出る。最初はためらっていたマルトナも最後には、老婆の誘いに乗り、自分の主人の金をごまかしているある従僕の手助けを受けることになる。しかし、間もなく、この従僕の主人である貴族のスヴェトンが、彼女の若さと美貌に惹かれて彼女のパトロンに座につく。最初の情夫は自分の主人が相手とあっては身を退かざるを得ないがマルトナに自分といっしょに主人の財産を自由に使おうではないかと持ちかける。彼女はそれを断りきれないでいるが、そのうち、田舎の領地にいるスヴェトンの父親が病気になり、スヴェトンは郷里に帰らねばならなくなる。そして、彼女はマルトナも連れて行くが、その時になって、自分がすでに結婚しており、郷里に妻が暮していることを打ち明ける。そして、彼はマルトナを自分の屋敷に近い友人の家に滞在させ、間もなく父親も回復したので、スヴェトンは足繁く彼女のもとへ通う。しかし、マルトナが存在に気づいたスヴェトンの妻が二人の密会の間を襲い、スヴェトンは逃げ出し、マルトナは散々に辱められたあげく、その土地から追い出されてしまう。そして、苦勞しながらモスクワに辿りつく。ここでマルトナは、ある信心深い役人の家の料理女として職場を見出し、その家で働くことになる。この家の主人である役人は信心深い男で、毎朝二時間もお祈りをあげているが、その間に彼の妻は客間に次々とやってくる請願者たちからあらゆる種類の賄賂を受け取る。そして、みんなで朝食をとる時に、末息子が、賄賂を持ってきた人々、またその賄賂の内容を詳しく書いたリストを父親に渡し、父親の役人はそれに基づいて万事を決定する手はずになっている。マルトナをはじめその家の召使いたちも時には賄賂のおこぼれにあずかる。しかし、その賄賂のおかげで、彼女が美しい装いを身につけ、人々からちやほやされるのに嫉妬した女主人は彼女を首にしてしまう。またもや職を失ったマルトナは、しかし、すぐに口入れ屋の骨折りで、男やもめのある退役大佐の家に家政婦として住みこむことになる。そして、大佐は彼女の美貌に魂を奪われ、マルトナは大佐と彼の家政を思うままに操つようになる。しかし、この老大佐の執心にも飽きたマルトナは、教会で出会った若い紳士に言い寄られ、このアハリという男に心移す。アハリは、五年間マルトナに会えなかった彼女の姉と自称し、女装して大佐の家にやってくる。大佐は、二人の姉妹の涙ながらの再会に感激して、この男のために泊る部屋を提供する。二人は大佐の家の中で夫婦になる誓いをし、馳け落ちする約束をする。そして、将来の生活に備えて、大佐の宝石や金銭を盗み出そうというアハリに同意し、それを盗み出したマルトナは先にアハリを出発させ、町の木戸で待ちあわせることになる。しかし、やっと家を脱け出したマルトナが約束の場所に来て、相手は現れず、すべては金を手に入れるためのアハリの計略であったことを知る。すぐすと家に帰ってきたマルトナを、彼女を熱愛している大佐はあっさり赦し、家に再び迎え入れる。しかし、彼女の家出による精神的苦悩があまりにも大きかったために、大佐は病気になって間もなく死んでしまう。そして大佐と仲違いして疎遠になっていた大佐の妹が乗りこんできて、マルトナを司直の手に渡し、彼女は監獄にとられる身となる。水とパンだけの生活を送っている獄中のマルトナのもとをある日アハリが訪れ、彼はマルトナに対する自分の仕打ちを後悔していること、彼女に対する恋心から彼女を救出する積りであることを告げる。そして監獄に勤務している士官スヴィダリの助けを借りて、彼女を救い出し、ある老婆の家に彼女を住まわせる。しかし、間もなく彼女をめぐるアハリとスヴィダリは決闘をすることになり、決闘に赴いたアハリはピストルで相手を殺したものと信じ、逃亡する。スヴィダリの死を知らされ

て嘆き悲しんでいるマルトナの目の前に、当のスヴィダリが姿を見せる。驚くマルトナに、スヴィダリは、決闘の際に二人のピストルからそっと弾を抜きとっていたこと、自分が死んだふりをしたのはアハリにそう信じてませて、恋敵を逃亡させるのが目的であったことを打ち明ける。こうして、マルトナとスヴィダリは幸福な生活を送っている。そこへ、殺人を犯したことへの自責の念と自分の愛する女を失った悲しみで今は死の一步手前にあるアハリから手紙が来て、アハリは死ぬ前に彼女に一目会いたいと言ってくる。アハリへの怨みも今は忘れたマルトナは、スヴィダリとともにアハリに会いに出かける。そして、スヴィダリの姿を目にしたアハリは、それが幽霊であると思ひこみ、半狂乱の状態に陥いる。ここで、この小説は終わっているが、但し、もともとこの小説は「第一部」と副題があり、最後にも「第一部の終り」と書いてあるので、作者は恐らく、この続きを書く積りであったと思われる。したがって研究者の中には、チュルコフが第二部を書いたのであるが、検閲のために許可されず、失われてしまったのだと考える者<sup>5)</sup>もいる。しかし、著者自身が晩年に発表した自分の著作目録（その中には未刊のものも含まれる）にも第二部を作品としてあげてない所を見れば、恐らくそれは書かれないままに終わったのであろう。

### (3)

以上のように粗筋をたどった「美人の料理女」について、それがヨーロッパ文学史におけるピカレスク小説のタイプに属するものであると断定するためには、ピカレスク小説なるものを定義づけ、チュルコフに至るまでの流れを簡単にでも辿る必要があるであろう。「ピカロ pícaro」という言葉の語源については様々の説があるが<sup>6)</sup>、ここでは浮浪者、放浪者の意味から、やくざ者、悪党、悪漢にいたるまでの広い意味を持つ言葉と理解しておく。

普通ピカレスク小説は、1554年にアントワープ、ブルゴスおよびアルカラ・デ・エナーレスで同時に出版された作者不明の「ラサリーリョ・デ・トルメス」に始まるとされている。あるいは、これに先立つ、14世紀前半のイータの僧正フワン・ルイスの詩編「よき恋の書」や15世紀末のフェルナンド・デ・ローハスの対話体小説「ラ・セレスティーナ」をすでにピカレスク的要素を持つ作品と考える場合もある。その下限については、これも人によって、少なくともスペインでは17世紀半ばでピカレスク小説の時代は終わったと考える立場から、現代文学の中にまでピカレスク小説を認める立場まで意見は大きく分れる。ロシア文学においても、ゴーゴリの「死せる魂」をピカレスク小説と見るかどうかについては定説はない。

そこで、今、かりにこれまでの多くの研究をもとに、ごく概括的にピカレスク小説について内容を規定し、その上で歴史的な問題に触れることにしよう。

(1) ピカレスク小説の主人公は、社会の底辺、きわめて貧しい階層に生をうけ、時にはその父親さえも誰か分らないような環境に生み落とされる。そして、早くから厳しい生活の荒波の中に投げ出され、一片のパンを得るためにも血みどろの闘いを余儀なくされる。そして、様々の主人に仕え（ピカラの場合には様々の男と生活を共にし）、時には夫婦、親子でもお互いに欺きあうほど、法や道徳も無視して生きねばならない。その意味で、ピカレスク小説の主人公は、聖者伝や騎士道物語の主人公とは対照的なアンチ・ヒーロー（反英雄）である。そして、様々の主人に仕える過程で運命の転変を身に受け、浮沈を繰り返す。主人公の望みは道徳的なあるいは社会的な理想を達成することではなく、たらふく食べて、性の欲求を満足させ、安定した経済的・社会的地位（ピカラの場合には結婚）に辿りつくことである。

(2) 小説形式の上では、人生の浮沈をくぐりぬけてある年月の後に、一定の安定した地位や職

業や幸福な結婚に到達した主人公自身が、自分の過去をふり返って生い立ちと生活のための戦いを語る「生涯の物語」として、一人称小説の形がとられるのが普通である。したがって、このタイプの小説においては、物語の筋の中で活躍する本来の「私」と、その主人公の語り時点における「私」との二重の「私」の間に一定の距離を介在させることが可能となる。第二の語り手としての「私」は、第一の「私」の行動や考えに道徳的批判を加えて作品の中へ長談議を持ちこむこともできるし、また、物語の中で活躍する「私」の知ることのできない他の主人公の物語を挿入することも可能となる。そうすると、純粹の一人称小説ではなく、一種の枠物語、あるいは「引き出し」小説の形をとることになる。「ラサリーリョ・デ・トルメス」の場合には、この距離はほとんど存在せず、純粹な一人称形式の小説となっている。「美人の料理女」も大体これに近い純粹なタイプとなっている。

(3) 上に述べたことと関連するが、物語の主人公に対する語り手としての主人公の立場から道徳的判断や自己批判めいた言葉が発せられる場合にも、それは厳しいものではなく、生活のために止むを得なかった、あるいは誘惑に負けたのは悪いが人間すべてに共通の弱点によるものだとして弁解され、正当化されることが多い。あるいは極端な場合には、作品の内容に対する道徳的批判をかわすためにつけられた道徳的談議である場合もある。ピカレスク小説の基礎にある生活感覚が底辺の庶民のものである以上、たとえ、作者が高い教養を備えた作家のような場合でも、むしろこの庶民の立場から価値判断はなされるのである。そこからピカレスク小説に対する例えば古典主義文学の側からの無道徳という非難も生じることになる。

(4) 主人公は生きるために様々の主人公に仕え、様々の職業に従事し、様々の土地を放浪し、様々の人間の社会環境に接触する。しかし、これら多様な人生と社会の絵巻は、牧歌小説や騎士道物語のような庶民の日常生活とは縁遠い、あるいは架空の世界のものであってはならず、小説の中で同時代の、あるいは少し前の時代の現実に存在する土地や職業が描かれるのが普通である。ただし、これは純粹な形では必ずしも常に実現されるわけではない。ピカレスクの小説がルーズな構成を持っているために、他の形式の小説と混りあい、例えば騎士道物語の要素を多く取り入れるような場合もあるからだし、また、読者の関心をそそるために未知の土地の描写を挿入する場合もあるからである。フィールドングの「大盗ジョナサン・ワイルド伝」は純粹なピカレスク小説とは言えないであろうが、広い意味でのピカレスクの伝統には含め得る。しかし、この作品の中にも、主人公の一人ハートフリー夫人の奇妙な冒険物語がはめこまれているのがその一例であろう。現実の地名という点について言えば、「美人の料理女」がロシアを舞台としていることは明かで、ポルタヴァ、キエフ、モスクワなどの地名は出てくるが、それ以上の具体的な記述はない。ケベードやデフォーでは、それが詳細に記述されているのが特徴である。

(5) 主人公は生活のために食うか食われるかの状況にいつも置かれており、彼の生きる社会環境の中では、人と人との関係は「騙すか、騙されるか」であり、人間の姿はその最も醜い欲望をむき出しにした姿で描かれることが多い。そして、主人公の他人を見る目は「不信、冷笑、嘲弄、皮肉」に満ちているのであり、当然、ピカレスク小説は諷刺小説としての側面を持っている。しかし、その諷刺がなにかの社会的理想に支えられた社会批判にまで高まるような場合には、もはや、その作品はピカレスク小説の枠を、少なくともその面では越えていると言わねばなるまい。

(6) 主人公は自分の生涯を辿り、その時々自分の心理を（それは決して深いものではない）描くことはできても、他の人物の心理を内側から描くことはできない。したがって主人公以外の諸人物は外から描かれるだけであり、しかも、典型的なピカレスク小説においては、他の人物は

主人公の人生の各段階にいわば孤立して生存するだけで、相互に関係を持つことはない。しかし、物語が長くなればなる程、各人物相互の間に関連が生じたり、主人公と登場人物との関係が複雑になる可能性がより大きくなる。そして、その全体が一つの連関を持つようになれば、それはもう単純なピカレスク小説とは言えず、社会小説、風俗小説への移行を意味することになる。

(7) たとえ、語り手としての私が物語の中の私に対して経験を積み、円熟した人物として対比されるような場合でも、少なくとも物語の中では主人公の性格が大きく変ったり、彼が精神的に成長を遂げることはない。その意味で、物語の中での経験は主人公のピカロとしての性格に影響を及ぼさないのである。もし、その成長を描くことになれば、それはいわゆるドイツ流「教養小説」へと転化することを意味するであろう。

こういった特徴を持ったピカレスク小説がなぜ16世紀～17世紀のスペインで生まれ、国内だけでなく、国外にまで強い影響を及ぼすことになったか、についてはこれまた多くの議論がある。その議論はチャンドラーその他の研究者の著作にゆずることにして、今は歴史の方に話をもどせば次のようになる。

「ラサリーリョ・デ・トルメス」は出版後間もなく、フランス語、英語、オランダ語などに翻訳されたが、1599年には、マテオ・アレマンの「グスマン・アルファラチェ」第一部、ついで先にもあげた「あばずれフスティーナ」、1613年にはセルバンテスの「模範小説集」、1618年にはビヤンテ・エスピネル「従士マルコス・デ・オブレゴンの生涯」、1626年にはケベードの「大悪党ドン・パブロスの生涯の物語」、1640年にはルイス・ベレス・デ・ゲバーラの「びっこの悪魔」、1642年にはアロンソ・デ・カスティージョ・ソロルサノの「セビーリヤの雌いたちと財布の釣針」、1646年には、作者不詳の「エステバニーリョ・ゴンサーレスの生涯」などが出版されてピカレスク小説の伝統が16～17世紀のスペイン小説の主流として確立されている。フランスでは、こういったスペインのピカレスク小説が次々に訳される一方では、それに刺激されてフランス流のピカレスク小説も書かれるようになる。1622年にはシャルル・ソレルの「フランシオンこっけい実話」、1656年にはスカロンの「芝居物語」が書かれている。チュルコフが後者を読んで影響を受けていることは「嘲弄者」「美人の料理女」に即して明かである。しかし、チュルコフの作品にもっとも関係が深いのは、ル・サーージュの1707年に初版が出た「跛の悪魔」と1715年の「ジル・ブラース」である。

イギリスおよびドイツのピカレスク小説については、デフォーの「モル・フランダーズ」以外は、チュルコフとは直接に関係がないので省略する。1722年に出版された「モル・フランダーズ」は1716年にフランス語訳が出ており、チュルコフが読んだ可能性は十分ある。

前にもどってチュルコフが小説を書きはじめた時期にどのようなピカレスク小説がロシア語に訳され、直接、間接にチュルコフの作品に影響を与えたかを見るために、シュトリーターによる表を見ると次のようになる。<sup>8)</sup>

1754年 「ジル・ブラース」第一巻

1760年 「ジル・ブラース」第二巻

1763年 「サラマンカの得業士」「跛の悪魔」

1764年 「サラマンカの得業士」

1765年 「エステバニーリョ・ゴンサーレス物語」(ル・サーージュの1734年のフランス語訳からのロシア語訳)

1766年 「ラサリーリョ・デ・トルメス」

1768年 「ジル・ブラス」第三巻

この直後には、フィールディングの「ジョナサン・ワイルド」も訳されている。

以上の表からもうかがわれるように、チュルコフが小説を書きはじめた時期には、「ラサリーリヨ」のような典型的なピカレスク小説やル・サージュの作品に触れる機会があったわけで、これにデフォー、スカロンを加えれば、チュルコフがピカレスク小説の手本として読む可能性のあった範囲はほぼ尽されることになる。

さらにチュルコフの作品、特に「美人の料理女」に即して、前記のピカレスク小説との関係を論じなければならないのであるが、時間と紙数の制約のためにひとまずここで中断せざるを得ない。これはチュルコフの作品研究のための序説に過ぎず、作品自体の研究は別の機会にゆずることにする。

#### 注

- (1) Jurij Striedter, Der Schelmenroman in Russland. Eine Beitrage zur Geschichte der Russischen Romans Vor Gogol', Berlin, 1961
- (2) J.G. Garrard, Mihail Čulkov. An introduction to his Prose and Verse, 1970, Mouton, The Hague - Paris
- (3) J. Striedter, Op.cit., p.59, J.G. Garrard, Op.cit., p.14

テキストとしては次のものを用いた。

- (4) М.Д. Чулков, Пригожая повариха, или Похождение развратной женщины, в сборнике «Русская проза XVllll века», Москва, 1971
- (5) たとえば Д.Д. Благой, История русской литературы XVllll века, Москва, 1960, стр.383
- (6) Frederick Monteser, The Picaresque Element in Western Literature, The University of Alabama Press, Alabama, p.14
- (7) たとえば, この時代のスペインにおいて乞食や浮浪児の数が異常に増えたことについて, チャンドラーは次のように述べている。

In Spain everything favored beggary and vagabondage, from the advantages to be derived from this self-seeking scheme of charity to the climate itself adapted to an outdoor life. While the percentage of illegitimacy was always large, infanticide in Spain was uncommon, abandonment taking its place. And these neglected children, joining in bands for juvenile depredation, were feeders for companies of elder rogues. So great a scandal had they become, indeed, that in 1552 the Cortes was brought to consider them in a petition requesting the appointment of special officers to have charge of collecting and providing with work the little rascals, who were running wild.

(Frank Wadleigh Chandler, Romances of Roguery. An Episode in the History of the Novel. The Picaresque Novel in Spain, New York, 1961, p.30)

- (8) J. Striedter. Op.cit., pp.286-287